ごめんなさいとつたえたい

落ちぶれた天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ごめんなさいとつたえたい

【Ｎコード】
Ｎ５３２５Ｚ

【作者名】
落ちぶれた天使

【あらすじ】
ああああああああああああああああああああああああああああああああ

前編

今日は日曜日。

コナンと蘭はデパートに買い物にきていた。

ここは洋服売り場。

蘭が楽しそうに服をみているそばでコナンは棒立ちしている。

そのときだった。

拳銃をもった男がコナンのそばにやってきた。

コナンはあきらかに混乱していた。

いきなり男がコナンにむけて八方してきた。

蘭が

コナンの前にとびだしてコナンを守ろうとした。

弾は蘭の太ももにふかくくいこんだ。

おぞましいほどに血がでてきている。

コナンは蘭にかけよった。

野次馬がやってきて男はにげていった。

蘭はそのまま病院に搬送された。

蘭にあたったたまは貫通していなくて、すぐに手術がおこなわれた。

コナンは手術室の前でただ呆然とたっていた。

「「「俺のせいで蘭はうたれたんだ・・・」」」

小五郎やえり、警部たちがきてもコナンはそのままだった。

めぐれ「犯人は新聞でコナン君のことをしり、キッドファンだろう。」

そのとき手術中のランプがきえて蘭と医者がでてきた。

医者「傷が思った以上ふかくてしばらく歩けないでしょう。次の手術まで半年、リハビリに1年はかかります。それまで運動はできないでしょう。」

小五郎「じゃあ蘭は高校で空手をもうできないのかよ!?」

えり「うそでしょう・・・!?」

コナン『空手が高校でもうできない?』

コナンはそのままたおれてしまった。

顔は真っ青でショックのせいかうまく呼吸ができていなかった。

コナンはすぐ酸素マスクをつけられ蘭とおなじ病室にねかされた。

目がさめるとないている蘭とそれをなだめているえりや小五郎、園子が目に入った。

蘭の目からはあふれんばかりの涙がでている。

コナンはまたすぐ胸がおしつけられるようになってくるしくなった。

イキガデキナイ・・・

俺の名前をよぶみんなの声がきこえる・・・

蘭以外の。

俺はそのまま気をうしなった。

目がさめたら病室ではなく家の寝室だった。

そばにはおっちゃんがたっている。

おっちゃんは俺をリビングにつれていってくれて夕食をだしてくれた。

なぜか俺は食べ物をみると吐き気がして蘭の泣いている声が頭によぎった。

おっちゃんが少しでもたべろといったのでしかたなく一口口にいれた。

だがすぐとてつもなく気持ち悪くなって戻してしまった。

おっちゃんがやさしく背中をさすってくれたがもう食べるきがしなく、そのままねてしまった。

～次の日～

また吐き気がする。

ベットには誰もいなくてかわりにきさき先生がはいってきた。

蘭が一時てきに退院したらしく、優しい顔で朝食をだしてくれた。

机には小五郎、真っ赤に目をはらした蘭、えり、そしてコナンがいる。

まだ食べる木にはなれなかった。

やっぱり目のまえに食べ物があると吐き気がした。

あわてて口をおさえる。

顔は真っ青になった。

えり「だ、大丈夫!?コナンくん!!」

小五郎「昨日もたべなかったよな!一回、あらいで先生にきてもらうか。電話してくる。」

コナンはえりにつれられて布団にはいった。

しばらくするとあらいでと小五郎が「はいってくる。

あらいでにいろいろ検査された。

あらいで「とくに体に異常はないとおもうんですが。たぶんショックのせいで食べ物がいやになってしまったんでしょう。今はどうすることもできないんです。一回おおきい病院にいったほうがいいですね。」

えり「大丈夫？コナン君。」

コナン「ごめ、んなさ、ぃ・・・」

声がとぎれていく。

体がいようにおもい。

あらいでとえりと小五郎が言えをでていった。

隣からは蘭のすすりなく声がきこえてくる。

そのたびにコナンは）胸がしめつけられた。

～5日後～

お見舞いに少年探偵団とはかせと哀がやってきた。

コナンは一切たべておらずねてもいなず栄養点滴でかろうじていきていた。

かなりやせて顔色もいっこうにわるかった。
まだ蘭はずっとないている。
一回もコナンとは口をきいていない。
哀「貴方、なんでそんなにやせてるの！？」
歩美「ちゃんと食べてる！？」
博士「顔色わるいぞ！？大丈夫か！？」
そこにえりがあらわれてコナンのこと、蘭のことを説明した。
みんな深刻な顔をしてきいていた。
蘭もやっとのことで部屋をでてきたが、目のしたは赤くはれていた。
探偵団にいわれて蘭はコナンの様子をみにいくことにした。
蘭はコナンをみると絶句した。
コナンはただうっすら目をあけているだけでなにもみえておない。
蘭はその場になきくずれた。
ごめんねとさけびつずけていた。
蘭と小五郎とえりと探偵団と博士は食事にいくことになりコナンは

ひとりねていた。

中篇

コナンは1人台所にむかい、冷蔵庫をあけ、小五郎がおいていってくれた、おかゆをだした。

目の前にするとやっぱりキツイ。

でもたべなくてはまた迷惑をかける。

タベルシカナイ。

蘭。

ふと蘭の顔が頭によぎる。

コナン「ら、ん・・・そういえば、新一として、ずっと電話かけてなかったけ・・・。最低だよな・・・俺・・・」

コナンはとりあえずおかゆを食べようとしてみた。

でも蘭への罪悪感につつまれる。

ダメダ・・・

アキラメルナ・・・

自然と沸いてくる言葉。

コナンはおかゆを少しれんげですくって口にはこんだ。

タベヨウ・・・

コナンはゆっくり口におかゆをいれた。

タベレタ・・・

おかゆをのみこんだ。

まぎれもない、

蘭の味・・・

ゴメンナ・・・

イチバンニイワナクチャイケナイコト、

オレ、

ワスレテタ。

ラン・・・

オレカラ、

カワラナクチャナ・・・

オレは決意した。

だけど人生はそううまくいかない。

家のドアがあく。

はいってきたのはまぎれもなくランの足を撃った男。

ウゴケナイ・・・

いままで食べてなかったせいでぜんぜん力が入らない。

ドウシテ？

ドウシテカミサマハコンナニイジワルナンデスカ？

後編

男「久しぶりだなぁ、キッドキラー。」

コナン「お前は、ランを撃った・・・・!?」

男「あの時はお世話になったな。あいにくお前に顔をみられているからな。」

コナン「それで俺を口封じに殺しにきた、ってわけか?」

男「さすがキッドキラー。」

男は関心するようにいった。

男の手にはガソリン。

そして何か薬品のしみこんだハンカチとロープを肩にかけている。

コナンはうごけない。

もっと食べておけばよかった・・・

いまさらおそい。

わかってる。

わかってるのに・・・

抵抗もむなしくハンカチで口をふさがれる。

あっという間にコナンは夢の中。

おきてみると体は足も手も壁に固定されて身動きひとつできない。

口にはさるぐつわ。

目の前には燃え盛る炎。

入ることも、出ることもできない。

そう、

絶望。

そとからは消防車のさいれんの音と蘭やおっちゃん、博士、少年探偵団、みんなの俺を呼ぶ叫び声。

クヤシイ。

アキラメタクナイ。

コナンは煙にのまれながら、

手探りで小五郎のビールのビンの空き瓶を割ってロープをきる。

拘束がはずれたが、

煙がくるしい。

ダメダ。

ランニ、ランニアイタイ・・・

サイゴノ、オネガイ・・・

キイテクレマスカ？

コナンはそこで気を失った。

めざめると、

目の前に蘭がいる。

病室？

周りにはさっき俺をよんでいた人達。

コナン「蘭、ねえちゃん？」

一斉にみんなの視線が俺にあつまる。

蘭「コナン君！！ごめんね、ごめんね！！」

コナン「え？」

蘭「足のけが、ちゃんとしらべてみたらそこまでひどくないらしくて、コナン君が手術してるとき私も手術だったの！いっしょにたたかおうとおもって。結果は成功！１週間後はもう空手やっていいって！！やったね！！」

コナン「本当！？あ、蘭姉ちゃんイワナクチャいけないことといってなかったんだ。」

蘭「え、なに？」

コナン「あの時、助けてくれてありがとう。」

蘭「うん！！」

蘭はコナンにだきついた。

§
E
N
D
§

後編

男「久しぶりだなぁ、キッドキラー。」

コナン「お前は、ランを撃った・・・・!?」

男「あの時はお世話になったな。あいにくお前に顔をみられているからな。」

コナン「それで俺を口封じに殺しにきた、ってわけか?」

男「さすがキッドキラー。」

男は関心するようにいった。

男の手にはガソリン。

そして何か薬品のしみこんだハンカチとロープを肩にかけている。

コナンはうごけない。

もっと食べておけばよかった・・・

いまさらおそい。

わかってる。

わかってるのに・・・

抵抗もむなしくハンカチで口をふさがれる。

あっという間にコナンは夢の中。

おきてみると体は足も手も壁に固定されて身動きひとつできない。

口にはさるぐつわ。

目の前には燃え盛る炎。

入ることも、出ることもできない。

そう、

絶望。

そとからは消防車のさいれんの音と蘭やおっちゃん、博士、少年探偵団、みんなの俺を呼ぶ叫び声。

クヤシイ。

アキラメタクナイ。

コナンは煙にのまれながら、

手探りで小五郎のビールのビンの空き瓶を割ってロープをきる。

拘束がはずれたが、

煙がくるしい。

ダメダ。

ランニ、ランニアイタイ・・・

サイゴノ、オネガイ・・・

キイテクレマスカ？

コナンはそこで気を失った。

めざめると、

目の前に蘭がいる。

病室？

周りにはさっき俺をよんでいた人達。

コナン「蘭、ねえちゃん？」

一斉にみんなの視線が俺にあつまる。

蘭「コナン君！！ごめんね、ごめんね！！」

コナン「え？」

蘭「足のけが、ちゃんとしらべてみたらそこまでひどくないらしくて、コナン君が手術してるとき私も手術だったの！いっしょにたたかおうとおもって。結果は成功！１週間後はもう空手やっていいって！！やったね！！」

コナン「本当！？あ、蘭姉ちゃんイワナクチャいけないことといってなかったんだ。」

蘭「え、なに？」

コナン「あの時、助けてくれてありがとう。」

蘭「うん！！」

蘭はコナンにだきついた。

〜END〜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5325z/

ごめんなさいとつたえたい

2011年12月19日21時10分発行